



棚田ライステラス

全国棚田(千枚田)連絡協議会

第50号 2008.12.10
(年3回発行)

発行／全国棚田(千枚田)連絡協議会
編集／ふるきやらネットワーク
〒184-8577 東京都金井町6-53 ふるきやらばん内
TEL:042-381-6721 / FAX:042-383-8614
<http://www.yukidaruma.or.jp/tanada/>

第14回全国棚田(千枚田)サミット1日目、長崎市大中尾棚田での火祭りの光景



第14回全国棚田(千枚田)サミット2日目、雲仙市清水棚田での見学会の様子





棚田地域の活性化に向けて

長崎県知事 金子 原二郎

Message

皆様におかれましては、日頃より棚田地域の保全活動や地域活性化への取り組みに大変なご尽力を賜り、深く感謝申し上げます。

また、全国棚田（千枚田）連絡協議会におかれましては、棚田地域の活性化や維持・保全に大きく寄与している「中山間地域等直接支払制度」の平成22年度以降の制度継続における、要望活動を積極的に展開されるなど、中山間地域の振興にご尽力をいただいておりますことに、心から敬意を表する次第であります。

さて、近年、棚田は日本を代表する原風景の一つとして、都市住民をはじめとして多くの方々に再認識されてきており、新たな観光資源として、また、環境や国土の良好な保全等の観点からその価値が重視されております。

しかしながら、棚田地域をはじめとする中山間地域は、高齢化や後継者不足により、その維持・保全が困難となつてきています。

今回のサミットで、皆様方から



日～18日の3日間、本県の長崎市及び雲仙市において、盛大に開催されましたことは、大変意義深いものであります。

最後になりましたが、今後とも皆様方のご支援、ご協力をお願い申し上げますとともに、全国棚田（千枚田）連絡協議会のますますのご活躍、ご発展をお祈りいたします。

皆様におかれましては、日頃より棚田地域の保全活動や地域活性化への取り組みに大変なご尽力を賜り、深く感謝申し上げます。

また、全国棚田（千枚田）連絡協議会におかれましては、棚田地域の活性化や維持・保全に大きく寄与している「中山間地域等直接支払制度」の平成22年度以降の制度継続における、要望活動を積極的に展開されるなど、中山間地域の振興にご尽力をいただいておりますことに、心から敬意を表する次第であります。

このような中、「第14回全国棚田（千枚田）サミット」が、全国の行政関係者や棚田保全に取り組む団体等の皆様方約1800人のご参加のもとに、平成20年10月16日～18日（3日間）に、長崎県のだんだん畑地区を「長崎県のだんだん畑十選」として認定いたしました。

今後は、「日本の棚田百選」の認定地区と併せ、人材の育成や地域活動を積極的に支援していくこととしており、こうした地域の活発な取り組みを全国へ情報発信していくことにより、県内各地の中山間地域も活性化させ、優良な農地や美しい景観の保全等に努めてまいりたいと考えております。

頂いた貴重なご意見は、今後、本県の棚田地域の振興施策に、是非参考にさせて頂きたいと考えております。

また、本県では、このサミットの開催を契機として、今年の9月に美しい景観を有し、活発な地域活動が期待できる中山間地域の優良な畑作地域の12地区を「長崎県のだんだん畑十選」として認定いたしました。

今後は、「日本の棚田百選」の認定地区と併せ、人材の育成や地域活動を積極的に支援していくこととしており、こうした地域の活発な取り組みを全国へ情報発信していくことにより、県内各地の中山間地域も活性化させ、優良な農地や美しい景観の保全等に努めてまいりたいと考えております。

最後になりましたが、今後とも皆様方のご支援、ご協力をお願い申し上げますとともに、全国棚田（千枚田）連絡協議会のますますのご活躍、ご発展をお祈りいたします。

太陽に恵まれた3日間

サミット実行委員会事務局 雲仙市観光物産まちづくり推進課 田中 秀穂

晩秋の長崎。爽やかな秋風になびく黄色の稻穂をイメージし、10月16～18日、第14回全国棚田（千枚田）サミットを長崎市と雲仙市で開催しました。

幸運にもお天気は見事な秋晴れ。ちょっと汗ばむぐらいの陽気で、中には日焼けした方もチラホラ。主催者の心配などどこ吹く風の3日間でした。

今回のサミットには、全国37都道府県、北海道から沖縄までの1800人、3日間の延べ参加者は2800人と多数のみなさまで大変賑わった大会となりました。長崎市の「アリーナかぶとがに」で開会式のあと、東京農工大 千賀裕太郎先生による基調講演でスタートしたサミットは、長崎市神浦小学校の児童による事例発表後、棚田百選の地長崎市外海地区の「大中尾棚田」へ移りました。

ここでは、東シナ海に沈む絶景の夕日を眺め、5000個の手作りランプを灯し、棚田を浮かび上がらせる演出に参加者も絶句するほどの美しさでした。

続けて2日目はダイナミックな石垣の棚田が特徴の雲仙市清水棚田へ場所を移し、先人が築いた見事な芸術作品を地元の方々や小学生の説明を聞きながらの見学会。お昼は稲刈り直後の棚田の中での特製棚田弁当に舌鼓をうち、目とおなかを満喫しました。

午後からは雲仙市で6つの会場に分かれ、5つの分科会と首長会議が行われ、

各会場とも予定を上回る参加者で、テー

マに沿った熱き議論が展開。3時間を感じさせない中身の濃い分科会でした。

分科会終了後の午後6時から、

みなさまお楽しみの全体交流会が雲仙メモリアルホールで行われ、600人の参加者で盛り上がりました。雲仙の各ホテル旅館の調理師さんが腕を振るつた料理や外のテンントでは「小浜ちゃんぽん」や「ド・ロさまそーめん」などの地元郷土料理もあり、ヒートアップした会場では、太鼓や二胡の演奏、鎧武者演舞や奇祭「鳥刺し」など多彩な舞台演出でこれまた賑わった交流会でした。

・特集・

第14回全国棚田サミット (千枚田)

長崎県長崎市・雲仙市にて
10月16～18日開催

基調講演

「みんなで語りつ、棚田の未来」を聞いて

東京都府中市在住・個人賛助会員

今井 英輔

初日、長崎県立総合体育館で開会式の

後、

「みんなで語ろう、棚田の未来」をテーマに、東京農工大学の千賀裕太郎教授

(棚田学会理事)の講演が行われた。

棚田地域は高齢化で過疎が急速に進んでいると指摘された。都市住民の農村移住意向調査結果によると団塊世代680万人のうち

具体的な提言として、行政による①食料・エネルギー自立政策、②農村定住促進政策、③高等教育費支援政策、④小学校総合機能保全政策の必要性など、具体的な事例をあげながらお話をいただいた。

最後に「棚田はひとりでは残らない。棚田地域の未来をみんなで描いてゆきましょう!」と結ばれた。参加された皆さんも、終始うなずきながら熱心に聞きた。

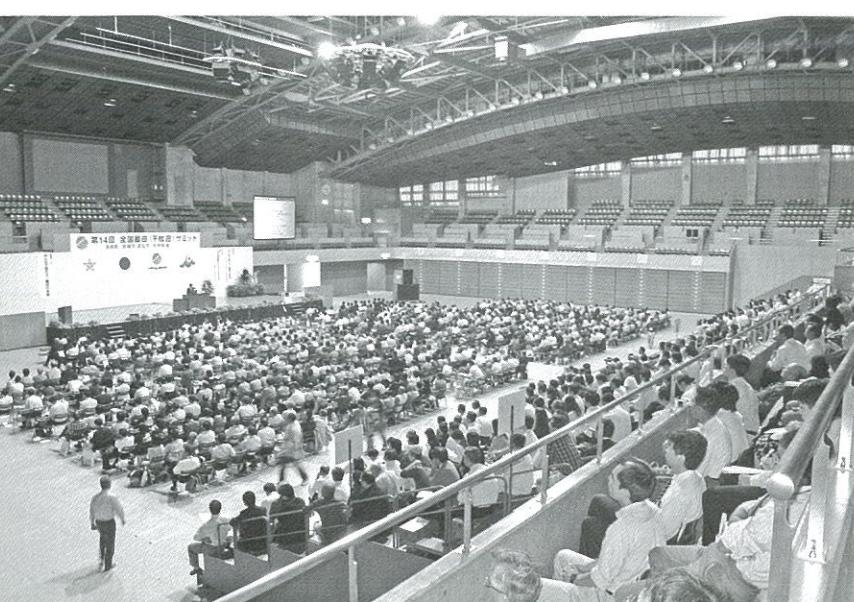
入っていた。

最終日は、同ホールにて、雲仙市立千ヶ石第二小学校児童による事例発表から始まり、各コーディネーターによる分科会の発表、そして

両市の棚田保全団体代表による「共同宣言」。最後に実行委員会副会長の田上長崎市長が締めくくり3日間のサミットを終了しました。

準備を進めてきた実行委員会では、多くの皆様にご協力を頂き、また数々の事務局の不手際をお天気と参加者みなさまに助けて頂きました。誠にありがとうございました。

棚田地域を挙げて、説明があつた。しかし、交流だけでは棚田地域は行き詰まる。交流を定住へとチエンジする必要がある。今、団塊の世代及び都会人は、棚田地域へと向かい一つある。いかに棚田地域に定住させるかが、大きな課題である。閉鎖的な棚田地域は行き詰まる。選択される棚田地域にする必要がある。



(棚田サミット特集写真:長崎市・雲仙市提供ほか)

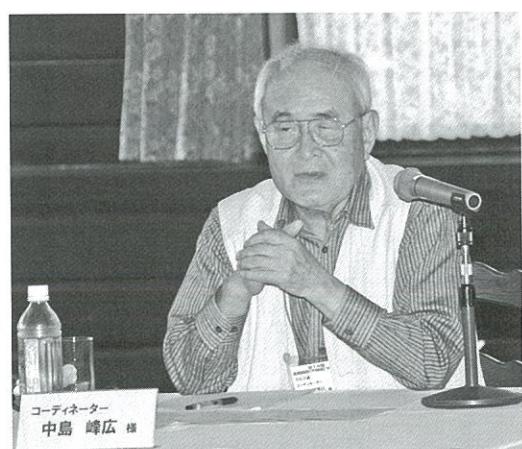
テーマ 中山間棚田地域の再生と夢のある中山間地域を目指して

棚田学会会長・早稲田大学名誉教授

中島 峰広(首長会議コーディネーター)

償の実現も視野に入れた議論を深めるべきであるという主張がなされた。

第2部では、連絡協議会が日常的に活動できること、あるいはすべきこととして「棚田米の販売」、会員の連携を深める「ネットワーキングの強化」、「石積み技術の伝承」などが議論された。とくに、「棚田米の販売」では連絡協議会が有機栽培や特別栽培のJAS規格や認証を与える機関にならなくても、なんらかの権威を与えて棚田米販売の仕組みができるのか、「ネットワーキングの強化」では経費節減のためサミットで使用する器物の使い廻しができないか、「石積み技術の伝承」では協力して技術継承塾の事例などが紹介された。



連絡協議会としては、ここで紹介、報告されたことを会員各位に伝え、情報を共有するとともに、提案や主張されたことを会員の場の話題として終わらせるのではなく、

具体的に実現する努力を今後しなければならないだろう。

第1分科会

コーディネーター
安井一臣氏
(棚田学会理事・棚田ネットワーク理事)

棚田と環境・教育

～棚田で遊ぼう、棚田で学ぼう～

当初は、子どもを対象と考えていたものが、会が進んでいくうちに、大人こそが棚田で遊び遊ぶことが必要ではないか……と展開。人間は生きもの。他の生物を食べなければ生きていけない、水を飲まなければいけない、空気を吸わなければならぬ。棚田にはこれすべてがそろい、これを次世代へ少しでも健全な形で残さなければならないと結論が出た。

分科会報告



第5分科会の様子

首長会議

首長とは、行政の長、市町村長のことである。これまで首長等会議とよび、一般会員も加わり短時間で実施されていたため、総会の延長という印象で終わっていた。今回はこれを改め、私が司会を務め首長のみが出席して十分な時間をとり、実のある討議が行われた。

会議は2部に分けられ、第1部では「自立への道」、「都市農村交流」、「政府の助成金」の3つのテーマが議論された。まず、「自立への道」では徳島県上勝町から高齢者にとっても作業の容易なユズ、彩りと米を組み合わせた複合経営の提案があった。棚田の作業のなかで最も骨が折れ技術を要する畦塗りについては、

福岡県星野村から管理機+小型畦塗機が利用できることと、村が単独事業で費用の半分を負担、半分を中山間地域等直接支払で充当し、購入された機械の共同利用が図られていることが紹介された。

「都市農村交流」では、最も活発な展開がみられる棚田オーナー制について議論が行われた。東京のマンション管理会社と契約、入居者を棚田オーナーや米の購入者にしている栃木県茂木町、農業を離れている後継者10数名が「若い衆会」として組織されオーナーの作業日に帰宅、一緒に作業している宮崎県日南市の事例。司会者からは保全の各種取組みを事業化し収入を得ている千葉県鴨川市、23組のオーナーの来訪回数が平均40日、最多1

43日、すべての作業を行う次世代型のオーナー制ともいわれる三重県いなべ市の事例などが紹介された。

また、企業の社会貢献(CSR)としては福岡県星野村で始まるとしているトヨタ福岡の活動。製薬会社であるアストラゼネカ社の全従業員3000名が棚田地域を中心とする全国55か所で行っているボランティア活動。学生の貢献としては静岡県松崎町で常葉富士大学の学生40~50名が畦切り・畦塗り・畦草刈りの3回、4泊7日の日程で作業に参加していることなどが報告された。

「政府の助成金」については、中山間地域等直接支払制度と農地・水・環境保全向上対策事業の継続、ことに前者は2009年度に第2期事業の終了が予定されているので存続させるための運動を盛り上げるとともにヨーロッパ型所得補

写真左：長崎市長・田上富久氏。右：雲仙市長・奥村慎太郎氏

大中尾棚田見学会にて「外海での交流会

第3分科会 地域づくりと棚田の継承 ～地域の宝を次世代へ～

オーナー制度の継続が地元に戻る人や週末農民等を生むと話が出たほか、中山間地域等直接支払制度が農業基盤を支えている実情や継続拡充の必要性も語られた。また、韓国の一企業と一つの村が提携する「一社一村運動」にヒントを得た。さらには、景観の視点から重要な資源として価値を認め、都市とのつながりが生まれる可能性が話された。

第4分科会 棚田地域での生産と販売戦略 ～安全・安心な食べ物を食卓へ～

地元農家の山本氏から「5kg3千円ならやつていける」と具体的な提案で市場原理での米販売へ疑問が出た。また、的確な消費者調査で成功した事例や温暖化で中山間地の有利さも話題に。さらに、パカンス先として農村が精神的拠り所となっているヨーロッパの事例も出、今後、中山間地域は地域間連携を取り、知恵を生かせば条件有利地域になるとまとまった。

第5分科会 百姓と共に語ろう日本の農業 ～山下惣一・宇根豊の農本主義師弟が「近代化」を斬る～

農民作家・山下惣一さんを迎えて、お金にならないものに価値がある世界を棚田や棚田サミットが広く知らせてきたと明言。例えば、棚田での米づくりは米だけでなく、生きものや水、ムラ、人間関係も守り作っている。産業界が行き詰まり、お金以外の価値が見えてきた今だからこそ、これらを百姓が暮らしのなかから表現し、伝える重要性を訴えた。



尾棚田保全組合の人々がその間隔を尋ねたところ、「2mおきじや」。文字のところは50cm間隔。どれだけ開ければ文字として読めるか実験してやった」といっていた。

全部で5000個だという。後で大中尾棚田保全組合の人にその間隔を尋ねたところ、「2mおきじや」。文字のところは50cm間隔。どれだけ開ければ文字として読めるか実験してやった」といっていた。

なかもんね

お母ちゃんの話は、灯りのぬくもりと相まって、胸にほんわかとした灯火を残してくれた。棚田の灯は、昨年の経験か

ら夜中の2~3時頃まで点いているところだった。ますます美しくなるという。ありがたいことだつた。ますます美しいことだつた。まさに美しかった。まさに美しかった。

ことに、事前に申し込んでおいた外海での交流会の会場は、この棚田の上に建つ地元の集会所。辺りが真っ暗になつてからもこの灯りを眺められる特典付きだつたとは……。

さて、その交流会であるが、期待を超えたものだつた。集会所から地元の食に舌鼓を打ちながら無数の灯りを眺める贅沢はいうまで

赤く艶やかな夕陽が沈み、闇が大中尾を覆いはじめ、点灯。スタンバイしているものだ。実際に棚田での「火祭り」を見るのははじめてだった筆者。火を灯す前の石油を入れた缶を見ると、どの缶も切った竹筒のなかに入れてあり、倒れないよう安全策が取られている。竹を取り、短く切つて等間隔に置いたのも地元農家なのだろうと思うと頭が下がつた。

「花が咲いたあるでしょ。去年、はじめてやつたと。去年も1人で見るのはもつたなかーと思うてね。市内の親戚に『迎えに行くけん、見にこんね』ゆうて急きよ誘うて一緒に見たと。喜んだよ。今年ももつたなかーと思うと、東京におる息子に写真ば撮つて送つてやりたか。この写真ば見たら、帰つてきたくなるにちがいなかもんね」

お母ちゃんの話は、灯りのぬくもりと相まって、胸にほんわかとした灯火を残してくれた。棚田の灯は、昨年の経験から夜中の2~3時頃まで点いているところだった。ますます美しくなるという。ありがたいことに、事前に申し込んでおいた外海での交流会の会場は、この棚田の上に建つ地元の集会所。辺りが真っ暗になつてからもこの灯りを眺められる特典付きだつたとは……。

さて、その交流会であるが、期待を超えたものだつた。集会所から地元の食に舌鼓を打ちながら無数の灯りを眺める贅沢はいうまで

もなく、地元の大中尾棚田保全組合のみなさんの気さくなこと。安心してそこに座り込み、中山間地の農村の魅力や大中尾の魅力なるものに話の花を咲かせた。

食もびちびちの刺身類やカサゴの煮物、地元の煮物、まんじゅう、地元名産「ドロさまそめん」……満足である。韓国

からの参加者も、新婚旅行がてらに来た元のお母ちゃんと一緒に、灯りが煌々と変化していく様を眺めることができた。

すぐ足下の田んぼがうちのだという地

元のお母ちゃんと一緒に、灯りが煌々と変化していく様を眺めることができた。

交流会後、宿舎へ移動するとき、しば

し、静寂のなか無言でゆらめく炎たちと向き合うことができた。最近、東京では青白く光る発光ダイオードが街を多く彩っているが、ここで目にしている光は、本物の火。空気でゆらめき、まるでささやくようにあたたかな色味を放っている。

交流会で地元保全組合のお父さんが隣で話していた。「本物の火は違う。人間は昔から火を畏れ、火で暖まり、火で食べ物を料理し、火で灯りを作ってきた。だから、本物の火にはぬくもりを感じる。本当に闇夜、真っ暗闇を知ると灯のありがたさがようわかる」。そんな内容だったと思う。

真っ暗ななか、灯のゆらめきが心に染みた。棚田のあぜの形どおり、闇夜に美しい弧がいくつも浮かび上がる。静かにゆらめく無数の灯りは「火祭り」というよりも「献灯」という言葉が値するよう

に思えた。

棚田を造つた先人たち、棚田を守り続けてきた先人たちの無数の魂へ贈る、感謝の灯火。今、棚田を明日につなごうとする人たちが、先人の涙や汗に感謝し、希望とともにこの灯火を天に向かって捧げているように思えた。

(ライステラス編集部

石井里津子)

千々石の棚田(清水棚田見学会)にて

(有)環境とまちづくり(徳島県上勝町在住)・個人正会員 澤田 俊明

サミット2日目、雲仙市の清水棚田へ伺つた。見学コースを歩くとまず、小川のせせらぎの心地よい音が聞こえる。そして、木々の間から石積みの棚田が姿を見せた。整然と積まれそして1枚ごとの水田が比較的大きい。気持ちがいい。

サミット資料によると10haで260枚とあるから、1枚平均では約4aとなるが、ざつと見たところ10aくらいの水田も幾つか見えた。清水棚田の石積みの石は比較的大きい。「千々石」との地名となり、豊富な石が清水棚田にあつた。

整然と積まれた石積みから、築造時には専門の職能団体の協力や農家間の強い協力体制があつたのでは、などと思いを巡らした。同時に、これだけの数えきれない石をきちんと石積みと農地に区分するだけでもたいへんなことだったので、と先人の苦労をかいま見る思いだつた。

私が事務局として関わっている徳島県上勝町の「櫻原の棚田」は、5.5haに約50枚の棚田で、1枚あたり1a前後の小さな水田が多く、櫻原の棚田では「小

さな面積」が重要な景観構成要素となつていて。櫻原の棚田の畦は、石積みと土坡が混在している。

何人かの地元農家の方に伺うと、櫻原地区では、個々の農家ごとに石積みや土坡を作つていつたとのこと。そのため、家ごとあるいは築造時の人手による櫻原の棚田の石積みは多様な材料、多様な積み方となつていて。

清水棚田の「千々石」の地名から櫻原の棚田の地名を思い浮かべた。櫻原の棚田の「小字名」には、「松」「竹」「徳」「福」などのおめでたい名がつけられている。棚田保全活動で「梅」がどこかにほしいなあ、と櫻原の人たちとの話題になつていて。

清水棚田では、地元のみなさんにプチトマトやおにぎりのお接待を受けた。どれもおいしく、みんなの元気な笑顔が印象に残つた。地元の小学生が棚田の案内の役を担つていた。日常的に子供の姿が見える棚田ができれば、と思ひながら、そして、たくさん元気をもらつて清水棚田をあとにした。

参加メンバーは、清水棚田保存会「岳棚田プロジェクト21」の会長である山本哲郎氏をはじめ集落の方々4名、長崎県や雲仙市から行政担当者4名、そして私たち一般参加者が5名、その他関係者数名という構成。一般参加者は少なかつたものの、むしろ参加者同士が近くに感じられる和やかな雰囲気の会となつた。

全員の自己紹介の後、今回のサミットについての感想や今後の課題、地域、減反をはじめとする農のこと、都市生活者との関わりなどについて、活発な意見交換が行われた。山本氏は「この田んぼを地元の人は棚田とは言つていなかつた。平成11年に『日本の棚田百選』に選ばれたのを機に棚田と呼ぶようになつた」と

NPO棚田ネットワーク(神奈川県川崎市在住) 久野 大輔

閉会式の終了後、オブショントアードあるエクスカーション「言いたい放題、座談会」に参加した。会場は2日目に棚田見学を行つた雲仙市千々石町清水棚田。

参加者は閉会式の行われた雲仙メモリアルホテルからマイクロバスに乗り、棚田展望台へ。前日歩いた棚田が一望でき、空・山・集落・棚田それぞれの要素が絶妙に組み合わさつて美しい景観を作り出しているのがよくわかる。

その後、上岳地区の水力発電所を見学。千々石町には3カ所の発電所があり、こぢんまりとした設備であるが、全戸(約2000戸)の消費電力量の約6割がまかれていているといふ。その発電所から徒歩数分の所にある「ヤマメの里」で座談会が行わられた。

参加メンバーは、清水棚田保存会「岳棚田プロジェクト21」の会長である山本哲郎氏をはじめ集落の方々4名、長崎県や雲仙市から行政担当者4名、そして私たち一般参加者が5名、その他関係者数名という構成。一般参加者は少なかつたものの、むしろ参加者同士が近くに感じられる和やかな雰囲気の会となつた。

目前に迫つていると言われる食糧危機について山本氏は「今まで切り離して考えられてきた食・農・農村・都市住民、すべてを一つのつながりとして一緒に考えていかなければならぬ」と強調し、そして「この思いをどのように形にして、他の地域や都市にまで発信し広めていくか。むしろこれからの方が重要」と語る。その言葉は、農村と都市をつなぐ仲介者としての我々に突きつけられた緊急課題でもあると受け止めた。

生活の糧を得る場としてだけではなく、地域と都市の幅広い交流の場へと変貌を遂げた清水棚田。雲仙市産業建設課・松下氏の「サミットの準備にあたり何もノウハウがないところから始めて、色々な人々と関係を築きながら皆が一丸となり、地域について考えたことは、自分にとつて大きな財産になつたと思う。その過程は希薄になりつつあつたコミュニティの復活にも大いに役立つた」という言葉に、

棚田サミットが果たすべき一つの役割に改めて気づかされた。

今回のサミットが、関係者だけでなく一般参加者にもPRが行われた事に話があり、参加者からは「動員数は多かつたが、若い人が少なかつた」という声もあがつた。「サミット」という名称が若い世代には、何か「関係者だけの会議」という印象を与えていたのでは、との意見もあり、若い一般参加者も楽しめるようなプログラムの必要性などが話し合われた。

このままでは、地域と都市の幅広い交流の場へと変貌を遂げた清水棚田。雲仙市産業建設課・松下氏の「サミットの準備にあたり何もノウハウがないところから始めて、色々な人々と関係を築きながら皆が一丸となり、地域について考えたことは、自分にとつて大きな財産になつたと思う。その過程は希薄になりつつあつたコミュニティの復活にも大いに役立つた」という言葉に、



清水棚田と小学生(写真はいづれも澤田氏)



櫻原の棚田と小さな水田



清水棚田のみなさんのプチトマト

「出会い・発見・ふれあとの『室』」

～清水棚田の学習を通して～

雲仙市立千々石第二小学校5・6年担任 鎌田 博

1 学校紹介



本校は130年余りの伝統ある学校です。現在、全校児童数43名で、3・4年、5・6年は、複式学級となっています。

校内に樹木が多く、緑に囲ま

れた学校で、春には美しい桜吹雪が舞い散るほどです。そのよい教育環境の中で、児童は素直に明るく成長し、毎日楽しい学校生活を送っています。

地域と学校の結びつきは深く、校内の様々な行事に地域及び高齢者の参加が多く、地域と学校が一体となつた教育が展開されています。本校の特色として、「地域の方々とのふれあい」や「少人数」を生かした活動があげられます。

2 全国棚田サミットでの研究発表

(1) 発表へ向けて

5・6年生16名と私は、研究発表へ向けて、やる気満々ではりきっていました。

岳棚田プロジェクト21（山本哲郎代表）のご協力のもと、千々石の清水棚田の学習を深めきました。

昨年度から、棚田の学習に取り組み始めました。



(2) 当日の発表内容

①清水棚田の今

②棚田の歴史

③棚田で体験・実験

④棚田のすばらしさ

⑤学んだこと

⑥これから棚田・守りたい棚田

(願いや思い)

⑦歌「棚田へ行こう」

⑧サミットを終えて

会場の約600名の参加者を前にして、発表の前は緊張していた子どもたちでした。

が、練習の成果を発揮し、堂々と立派に自分たちの研究成果を発表し、棚田の未来について5つの提言をすることができました。

発表後の大拍手

3 これからかけ橋

嬉しいことに、サミット終了後も全国の皆様と交流が続いています。子どもたちへ、お手紙や写真、お米などを送ってくださった参加者の方がいらっしゃいます。人のあたたかさにふれ、私も子どもたちも感謝の思いでいっぱいです。

来年度の開催県である新潟県への「棚田への熱い思い」のバトンをつなぐまで、「全国棚田サミット」にしっかりと協力し、次の開催県へのかけ橋になろう」と子どもたちと話しています。

これまで、ご理解とご協力をいただきました皆様に、心より厚くお礼申上げます。ありがとうございました。





清水棚田で出た地場産の緑茶。ボトルのラベルは小学生の棚田の絵。一つ一つ違う絵(ラベル)が貼られていた



事例発表1：長崎市立神浦小学校のオーナー制度の研究発表



第4分科会の様子



「大中尾棚田保全組合」代表広山昭作さん(左)と「岳棚田プロジェクト21」代表の山本哲郎さん(右)による共同宣言



大中尾棚田見学会での地元保育園児による太鼓演奏

そとめ 外海「大中尾棚田保全組合」から おおなかお

長崎市 大中尾棚田保全組合代表 広山 昭作

大中尾棚田保全組合では、地元見学会の指定を受けて以来、話し合いを行いました。10月中旬は、稲刈り後で棚田の四季のうちで見所のない時期であり、さらに見学会が夕方にかけての時間帯でもあり、話し合いの結果、火祭りを実施することになりました。

まず最初に、10haの棚田面積で現地調査を行い、設置個数を5000個と目標を定めました。数ヶ月の間、土日を中心にして竹を切り出し、切断。空き缶の回収など準備作業を進め、組合員の協力で目標をクリアできました。

さらに当日は、100名以上のボランティアの協力で予定通り、午後5時45分に点火でき、協力者のみなさまに心からお礼申し上げます。

引き続き、各地域から参加されたみなさんの1人でも多くの方との交流を考え、小交流会を計画したところ、大会関係者、棚田学会の中島会長、全国棚田(千枚田)連絡協議会会長の茂木町長、今サミットの実行委員長の雲仙市長、副実行委員長の長崎市長、基調講演者である千賀先生、さらには韓国より参加された数名の方、そのほか地元関係者を含め、総勢70名の方と交流ができ、小交流会が大交流会となり、きわめて意義ある会になりました。

17日は会場を雲仙市に移し、清水棚田

見学会。午後は雲仙温泉各ホテルを会場に、分科会が行われ、5つの分科会でそれぞれの立場から論議が行われ、目的が十分達せられた分科会であったと思います。

本大会を通して2点について申し上げますと、1点目は、神浦小学校及び千々石第二小学校の事例発表の研究内容が、私たち大人にとって勇気と感動を与えてくれ、将来に至る心と希望が持てるすばらしい研究発表であったこと。心から感謝したい。

第2に、ここしばらくサミットで実施されていなかつた分科会が、本大会で取り組みがなされ、5分科会に分かれ、それぞれのテーマを中心にコーディネーターの司会で論議が行われたこと。この分科会こそが、大会の屋台骨だと考えます。

最後に、本大会のメインテーマである「みんなで語ろう、棚田の未来」ですが、中山間地の農地を「どがんすれば」現場を維持できるのか、私ども農民に与えられた役割と同じ避けて通れない問題だと思います。

悩みを持つ同志が一堂に会して、論議する機械は本会をおいて、他にないと思います。サミットが回を重ねることにより、充実発展することを心から期待しております。



全体交流会では地元の土産や名物がずらり



第1分科会のコーディネーターでもある安井氏が、交流会の乾杯の音頭を取った



2日目の全体交流会の締めくくりは、次回開催地、新潟県十日町市のみなさまからのアピール

千々石「岳棚田プロジェクト」から

雲仙市 岳棚田プロジェクト21代表

山本
哲郎

北国からはすでに雪の便りが聞かれる時節となりました。早々もので棚田せ

いう再確認の場であつたらいいなあと感じた次第です。

一、それぞれの分科会からの報告がなされ、それらから解つてきたこと。参加者

ミットから1ヶ月余りが流れています。
柿の葉の音もなく散る風情は、間もなく
冬と無言で知らせてくれます。

5年後、10年後のことなど、私にはほとんど判りませぬ。只、科学、化学は不可能を可能に変えて参りました。御陰を持

各位が何を言いたいのか、何を聞きたいのか、そして誰が主役であるのかという指摘がなされたこと。一過性のイベント

か？ ご拝察申し上げます。多くの人々

実でございます。

あつて、原点への回帰が必要である。

が詰めた日ひにいへしときの青羽が戻っています。今年も秋の穂りの約束を確かなまでに果たした田んぼ達が誇らしげな顔をして、しばし休ませてくれと言わんばかりに、にんまりと微笑んでおり

性という消えない明かりを灯してみたい
家族を愛するようになせない郷土愛を持
つていい。それから確かなことが見
えにくい、確かなことが判りにくい時代
ではあります、棚田に吹く風と共に農

開催地としての責務を、生物多様性と生態系機能のバランスの中で果たせたのを問うことができたのか。

開催地としての責務を、生物多様性と生態系機能のバランスの中で果たせたのを問うことができたのか。これまで開催地としての責務を、生物多様性と生態系機能のバランスの中で果たせたのを問うことができたのか。

その節は、大変多くの足跡を残していく

業の新しい理念、新しい市場原理の台頭

九〇

れましたね。少しは痛さをこらえた時もありましたが、ご参会の皆様の胸中を察すると私も頑張つて、それに応えようとしましたよ。

を私は心から願つてゐるのです。
だからこそ、棚田の持つ社会的な意義
と風土が育んだ多彩な文化を少しでも発
信できたらと諦めないで今を生きており

主催者、行政、農民、消費者、都市生活者の相互理解を共有しながら、その「手段」と「目的」が開催地のそれと同調することが必要である（何を持つて成

全国各地のお力添えのその頂点で、サミットを開催することができましたことを重ね重ね御礼申し上げたいと思います。何分にも私には言葉を発することができます

ます。繁栄の中に豊かさと幸せを見つける
ようとしたことが、田んぼをいじめ、地
球を壊し始めたことは有史以来、なかつ
たことですぞ!!

功裏とするのか)。

ませぬ故に、果たしてお役に立てたか。サミットの成果があるや無しやは言下には申しませぬが、日本の原風景はその観ではなく、稻作文化そのものであると

以下に、罪多き人間達がサミットの反省会と称し、次期開催地に他山の石にてもと殊勝な心がけを試みたほんの一部をこつそりお伝えしておきますね。

最後に、農民は今日さす傘が必要なん
だつてさ。自給力が無くなる前にね。
全国の皆さん、長崎から万感の思いを
込め、ありがとうございました。

第14回全国棚田（千枚田）サミットに参加して、韓国からみた所感

韓国農村経済研究院研究委員

キム テーゴン
金泰坤

大中尾棚田での交流会にて。韓国のみなさんの紹介

今年、長崎市と雲仙市で開かれた第14回全国棚田（千枚田）サミットに参加させていただいた。幸いに分科会で韓国の棚田保全活動について話題を提供する機会も与えられた。そして韓国で景観のいい棚田地域として知られている加川棚田の農家達6人もサミットに参加された。

彼らにとつては非常に幸運だったと思う。日本と韓国で棚田を介して交流が始まつたのは、2006年、日本の棚田学会の韓国視察からである。視察先は智異山の周辺である河東郡の棚田と今回参加した地域の加川棚田であった。その時、郡の普及センターの李敬姫氏の「加川棚田の保全活動について」、そして東京農工大学の千賀裕太郎教授の「日本における棚田保全活動と課題について」、それぞれの講演があつた。

これをもつてお互いの事情を理解するようになった。田植えの体験をもしたが、今もその水田は日韓友好の棚田として表示されている。これが、それから2年余り経つて

加川棚田のリーダー達が今回のサミットに参加されるようになつた由縁である。

加川棚田は慶尚南道南海郡の最南端で海に接している。一つの島が基礎自治体の郡になっている。郡の人口は

ピーカのときは15万人だったのが、今は5万人と減つた。1970年代初め頃、陸地と島をむすぶ連陸橋ができるから人口が急減したそうだ。主な作物はコメと裏作のニンニクやほうれん草等だ。

もともと、この地域で棚田が出来たのは400年ほど前の話で、集落の後ろにある山の頂上に烽火台があつて、石築の技術を持つた兵士が集落の食糧確保のために開田したということである。

海に接した急傾斜地で600区画という規模から他の地域に比べ景観が優れているという点で加川棚田の保全活動は活発だ。それで行政からの支援によりインフラが整備されたわけである。それから最近は、一社一村運動の形として保全活動が続いている。

一社一村運動とは農協中央会の斡旋で

企業や学校、社会団体等と農村集落が姉妹組織を結び、持続的に交流する活動である。5年ほど前から財界と農協が合意し、活動が始まつたが、今は全国で800組に達する。

この地域は三星グループの系列企業である三星電気の釜山工場を姉妹企業として、2004年から交流をしている。主な活動は、農作業手伝いや景観工事、農産物の購買、社員の研修、祭りへの支援、社員の棚田トラスト参加、農産物の提供等であるが、交流の幅が広がっている。

一社一村運動は、企業の社会貢献の充実や社員参加による会社の活性化等の効果があると同時に、棚田集落も地域の課題である所得確保や地域活性化の効果がある。つまり、企業の参加により地域活性化には可能性が高く、より拡散されるべきである。しかし、肝心の耕作放棄の防止については課題が残っている。

高齢化等によつて耕作放棄地が増えている現状に対し、去年から棚田トラストも始まつたが、期待ほどは減つてはいない。外部からの支援により所得は増えているけれど、耕作放棄化が止まらないということは多面的機能や景観等の崩壊の恐れがある。将来、人々に忘れられてしまうという不安さえもある。

こういう点からみれば、サミットの視察地である大中尾棚田と清水棚田は営農活動により、確実に保全されているのが韓国との違う点であった。特に小学生の事例報告や活動ぶりが目立つた。サミットそのものも一本やりではなく、行政や市民、団体、農家、小学生等のように参加範囲の幅広いことが面白い点であった。男女老少参加型の内発性の強い保全活動だと思う。

今回のサミットで非常に刺激を受けた。これについては私はもちろんで、加川棚田の農家達にはもつと強かつただろう。彼らは来年の十日町市にも参加したい、また婦人会のメンバーも参加させたい、これが、理解の輪を広げて、「皆で語ろう、棚田の未来」、といいながら今年のサミットの視察を締め括つた。



烽火台がある山の頂上からみた棚田の風景

今もその水田は日韓友好の棚田として表示されている。これが、それから2年余り経つて加川棚田のリーダー達が今回のサミットに参加されるようになつた由縁である。

加川棚田は慶尚南道南海郡の最南端で海に接している。一つの島が基礎自治体の郡になっている。郡の人口は

金泰坤氏。大中尾棚田にて



テーマソング「棚田へ行こう！」が歌い継がれて

宮崎県日南市 農林水産課 農業政策係 安部 裕一

今回の雲仙・長崎サミットの行く先々で歌われ、全国から参加した棚田関係者の熱い思いにエールを送ってくれたサミットテーマソング「棚田へ行こう！」。

第12回サミットのテーマソングとして産声を上げてから2年が経ち、棚田関係者には全国区でこの歌を広めて頂いたことに感謝を申しあげます。特に今回、子どもたちの交流と歌唱指導を目的に、シングアウトキッズを夏休みにご招待下さった雲仙市、長崎市の関係者のみなさんがどうございました。

様々な場面で歌い出しの「晴れた日は棚田へ行こう♪」の元気な歌声が聞こえてくる度に、歌い継いでもらえたことへのうれしさと感謝で胸が熱くなりました。まさに「棚田へ行こう！」が全国のみなさんに受け入れられた瞬間（サミット）だったと言えるかもしれません。

歌を作ったシングアウトキッズ代表の鈴木さんは当時打ち合わせを行った際、「この曲が全国の棚田で歌われ、それでは棚田で頑張っている人が元気になつてくれれば、うれしい」と言つていました。また、「NHKの『みんなのうた』で流れるぐらいになれば良いよね」とヒットの夢を語つたことを覚えていました。

良い歌は、時が流れようとも、新鮮さを失いません。かえつて年を重ねる毎に、歌に広がりが出てくると思います。「棚田へ行こう！」は、最初より昨年、昨年より今年と年月が積み重なり、歌い継ぐ人の広がりが増えるほどに棚田サミットの貌として成長しているように感じます。

人と自然が織りなす稻作文化の長い歴史の中で「ふるさとの原風景」と呼ばれるまでになつた棚田。もしかしたら、この歌を棚田が成長させているのかもしれません。

さて、次期開催地として来年のサミットを担当させていただきます新潟県の十日町市です。

十日町市は、新潟県の南部に位置し、南北には大河信濃川が流れ、市域の7割が森林に囲まれた緑豊かなまちです。人口は6万2000人で、魚沼産コシヒカリの主要な生産地であることから農業とともに古くから織物・きもの産業などが盛んであります。また、雪のまちとしても名を馳せており、毎年2~3mの積雪があります。

当十日町市の棚田は、新潟県が「棚田

第14回全国棚田（千枚田）サミットのすばらしき余韻がまだいっぱい残っています。このように盛大に開催されご成功されました。雲仙市・長崎市の皆様には心からおめでとうと感謝の言葉を申し上げる次第です。

開催地の皆様方には、素晴らしい笑顔と心温まるおもてなしもいただき、当市から参加しました全員が異口同音に感激をしておりました。ありがとうございます。

さて、次期開催地として来年のサミットを担当させていただきます新潟県の十日町市です。

新潟県十日町市長 田口 直人

新潟県十日町市の棚田で待つてのすけの

新潟県十日町市長 田口 直人

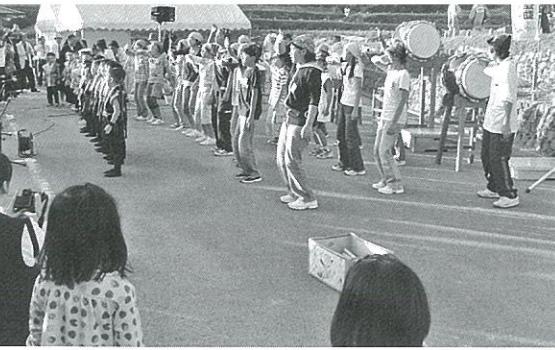
を題材にして広範囲な芸術祭を行っています。来年は4回目の芸術祭となります。が、このような取り組みを行っています。

十日町市の棚田には、雪国ならではの特徴がいろいろあります。棚田の水を保持するため秋の収穫後に代播きをするのもその一つです。10月末になると水が張られた棚田に霧が差し込み、すばらしい景観となり、春と同じくこの時期になると全国から大勢のカメラマンが訪れます。

いま、十日町市ならではの棚田サミットとなるよう準備に励んでいますが、第

15回全国棚田（千枚田）サミットは、平成21年10月16日と17日の2日間で開催します。全国に同じ棚田の夢や課題を持つ関係者が一堂に会して、有意義に棚田についての情報交換や交流ができるようと考えています。全国から大勢の皆様のお越しを心からお待ちいたしております。

「雪の雫が育てた棚田」十日町市でお願いしましよう。どうぞよろしくお願いいたします。



「棚田へ行こう」は、サミットのいろいろな場所で歌われた。地元小学生の事例発表や見学会のアトラクションでも披露



棚田へ行こう」の元気な歌声が聞こえてくる度に、歌い継いでもらえたことへのうれしさと感謝で胸が熱くなりました。まさに「棚田へ行こう！」が全国のみなさんに受け入れられた瞬間（サミット）だったと言えるかもしれません。

歌を作ったシングアウトキッズ代表の鈴木さんは当時打ち合わせを行った際、「この曲が全国の棚田で歌われ、それでは棚田で頑張っている人が元気になつてくれれば、うれしい」と言つていました。また、「NHKの『みんなのうた』で流れるぐらいになれば良いよね」とヒットの夢を語つたことを覚えていました。

良い歌は、時が流れようとも、新鮮さを失いません。かえつて年を重ねる毎に、歌に広がりが出てくると思います。「棚田へ行こう！」は、最初より昨年、昨年より今年と年月が積み重なり、歌い継ぐ人の広がりが増えるほどに棚田サミットの貌として成長しているように感じます。

人と自然が織りなす稻作文化の長い歴史の中で「ふるさとの原風景」と呼ばれるまでになつた棚田。もしかしたら、この歌を棚田が成長させているのかもしれません。

さて、次期開催地として来年のサミットを担当させていただきます新潟県の十日町市です。

十日町市は、新潟県の南部に位置し、南北には大河信濃川が流れ、市域の7割が森林に囲まれた緑豊かなまちです。人口は6万2000人で、魚沼産コシヒカリの主要な生産地であることから農業とともに古くから織物・きもの産業などが盛んであります。また、雪のまちとしても名を馳せており、毎年2~3mの積雪があります。

当十日町市の棚田は、新潟県が「棚田

のある風景」として県下170か所を認定したなかで、十日町市には30か所の認定箇所があります。この棚田には、いま深刻な課題が山積をしております。しかし、それを逆手にとつて、「越後田舎体験」と銘打つて、子供たちを中心に都会の学校との体験交流の舞台に、また、「大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ」として3年に一度、棚田など地域の自然

「大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ」の光景

蕨野の棚田が国の重要文化的景観に選定― わらびの

佐賀県唐津市にある「蕨野の棚田」は、平成20年7月28日に、棚田では全国初となる「重要文化的景観」に選定されました。地域と行政が一体となり、棚田の保存管理の枠組みを決め、次世代へと受け継いでいくことを目指し、保全活動に取り組んでいます。

文化的景観の保存・活用事業への申請

平成12年、文化庁において、「農林水産業に関連する文化的景観の保護に関する調査研究」が行われ、その調査対象地に、蕨野の棚田が相知町（現唐津市）から推薦されました。平成15年には、調査対象地の中から、全国で180カ所の重要地域が選出され、蕨野の棚田もその一つに選ばれています。

2008棚田ウォークの様子

「文化的景観の保存・活用事業（事業期間：平成16年度～17年度）」に関する対象地を募集されました。

工法とすること、農地を転用し植林する場合（注）は、筆境から一定の距離をとることなど、独自のルールを策定していました。「文化的景観の保存・活用事業」に申請するかどうか、地区役員を中心に協議をして、次の結論が出来ました。

「棚田の文化的な価値を見出すことは、地元にとっても保全活動の意欲向上に繋がるため、事業申請をしたい。しかし、申請により、當農に支障となる（例えば、簡易な農道拡幅もできないなど）ことがあるならば、申請はしない」

この営農を優先する考え方は、重要な文化的景観選定の申出を行つまで、一貫していました。

(注) 蘭里の棚田では、里名(木代)が残っています。この里名は、棚田の外周部に植林を実施し、森として棚田とともに保全していく方策をとっています。

保存・活用事業から保存計画の策定へ

平成16年6月に、文化的景観の保存・活用事業（全国で9カ所）の採択を受け、薩摩の棚田文化的景観検討委員会が設置され

ました。しかし、同年には第10回全国棚田（千枚田）サミットの開催がひかえていたため、検討委員会の開催は10月からとなりました。

保全・管理計画の概要

平成18年からは、蕨野の棚田
文化的景観保存管理計画検討委
員会が設置され、地元での意見
とワークショップでの意見を踏
まえて、保全・管理計画の策定
が行われました。

保全・管理計画では、棚田エリアでどのように重要なと思われる箇所を「棚田Ⅰ種」として現状維持を第一に考え、重点的に保全していくこととしています。その他の棚田は、それに準ずるものとして、「棚田Ⅱ種」、「棚田Ⅲ種」と分類されています。

また、あくまで農業の継続が前提とされており、営農環境改善のための整備構想（農道や水路の整備、来訪者受け入れ環境改善等）をとりまとめています。

棚田を次代へ引き継ぐために

なるのではないかと心配してしまいます。

先祖が開拓し、現在まで受け継がれてきた蕨野の棚田の莊厳さや美しさ、石積み技術が文化的景観として認められ、重要文化的景観に選定されたことは、私たちのゆるぎない誇りであります。しかしながら、高齢化の進行や担い手不足等、厳しい現実があることは他の地域と同様です。

地域内での活動をより活発にしていくとともに、地域外との交流もより活性化させることで、蕨野の棚田の景観を守る育てる組織をつくり、活動するよう進めていきたいと考えています。



「通潤用水と白糸台地の棚田景観」が 全国8例目の国選定重要文化的景観に

熊本県上益城郡山都町（平成17年に旧矢部町、旧清和村、旧蘇陽町が合併）は、日本最大の石橋アーチ橋で豪快な放水を見ることができる国指定重要文化財（「通潤橋」）が有名ですが、それにもまつわる「安政申談（あんせいしんたん）」頭書」という古文書が存在します。

これは「通潤橋」が完成して間もない頃、その恩恵を受ける村々の庄屋が通潤橋で一堂に会し、管理について様々な議事を記録した会議録です。この場所での会議は現代でも連綿と続いているおり、それまで農業用水のみならず飲料水まで事欠いていた白糸台地の人々が、感謝の念を忘れないようにという思いが過去から現代まで継続している証といえます。

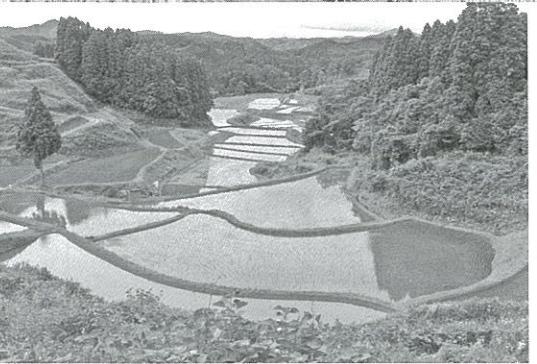
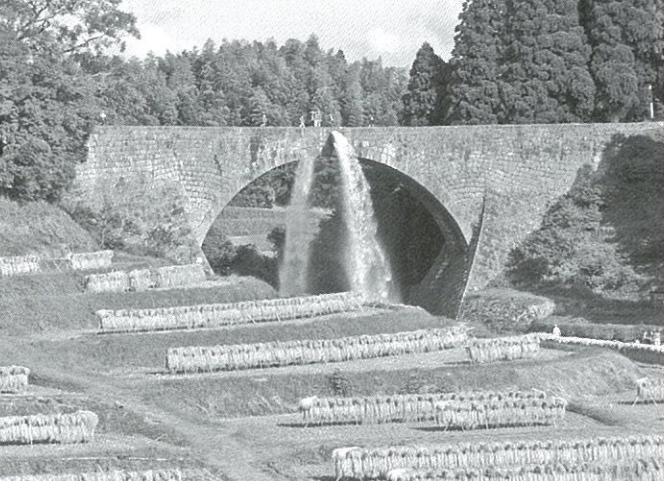
（景観）
が、全
国8例
目の国

選定重要な文化的景観となりました。

今回の選定においては、「通潤橋を含む「通潤用水」という農業基盤施設によって形成された棚田の景観が評価の対象となっています。この景観の主な特徴として、地域主導の公共事業として評価される通潤用水建設事業の歴史的意義、建設に用いられた土木技術、用水路内に生息する希少種の存在、現代においても維持されている伝統的管理制度などを挙げることができます。

そもそも「文化的景観」とは、平成17年の文化財保護法の改正によって設けられた新しい種類の文化財で、「その地域独自の風土に根ざして営まれてきた生活や生業によって形成された景観地」のことを指します。このことから重要文化的景観の選定は、文化財としての価値のみならず、景観を形成する要因となつた何気ない農村の生活をも評価することに繋がるものといえます。

現在、町内においても他の例に漏れず後継者不足などの厳しい農村事情に直面していますが、少しでも状況を好転させる材料として今回の選定を活かせるよう地域各種団体・行政が一体となって、保全のための取り組みを進めていく必要があると考えています。



（熊本県山都町教育委員会 生涯学習課
西慶喜）

全国棚田（千枚田）連絡協議会の自治体会員は現在57市町村です。棚田の保全・利活用、また中山間地域の活性化を目指しています。新しい自治体正会員からのお便りです。

新潟県津南町

「結束集落石垣田（棚田）」

心に、農業立町としてこれまで発展してきました。

津南町は新潟県の最南端、千曲川が信濃川と名を変える長野県境に位置し、信濃川と共に注ぐ志久見川・中津川・清津川によって形成された日本有数の『河岸段丘』に拓けた人口1万1000人余りの町です。

町は、昭和30年に旧6か村が合併し誕生しました。ここ数年、平成の大合併が進むなかにあって合併はせず、住民の創意と英知を結集し、地域の潜在的資源の発掘と活用を図りながら、自らを律し自ら立つ「自律（立）」する町として、現在もその歩みを続けています。

ここ津南は、日本一の豪雪地としても知られ、冬となると4mにも及ぶ雪に覆われます。町はこの豊富な雪解け水と広大な農地を利用して魚沼産コシヒカリをはじめ、雪下にんじん、アスパラガス、スイートコーンなど高原野菜の生産を中心

する重要な地域として、現在もそのほとんどが当時のままの姿で残されています。耕作面積は約12ha、平成7年には東日本では珍しいとされるその美しい石垣の棚田の景観から「日本の農村景観百選」にも選ばれました。

ここに来るといまでも耕耘機に稻を山積みにして家路に向かう光景に出会えます。そしてここには、「日本の原風景」日本人の心の故郷がいまも息づいています。（津南町 地域振興課 商工観光班 高橋昌史）

新しく自治体会員が増えました



（津南町 地域振興課 商工観光班 高橋昌史）

お便り テラス

徳島県上勝町
櫻原の棚田から

仮定2011年 全国棚田サミット 実施に向かって

平成11年農水省の「棚田百選」に選ばれた櫻原の棚田で暮らしている私達。百姓がオーナー制などで、都市住民などと交流する中で、「自分達の棚田に広く全国の人々を迎えて、交流できたらなあ」との思いが、昨年頃から盛り上がり始め、町役場や県農山村整備課などに相談して、「とにかくサミットを行って、覗いてみなければ始まらない。駄目でもとも」と話がまとまり、県や町の協力で参加することになった。

高知県椿原町での第1回サミット以来、地元から参加したことのある人間が、昨年まで私一人しかいなかつたので、昨年3人で栃木県茂木町のサミットに参加し、合計4人の経験者ができた。今年、町職員も含め、9人の人間が参加し、櫻原でもやれるか、どうやればできるか、判断しようとなつたのである。県も10万円程度だが、旅費の助成を考えて下さり、町と職員2名の参加で公用車使用の許可が出た。以下、サミットレポートアレコレである。

第14回全国棚田サミットは長崎県長崎市・雲仙市の共催で県庁所在市での開催は、初めてである。10月16～18日の3日間、気温25～27度の晴天続きであった。16日の午前中に総会があるため、出発は15日午前4時30分役場前。2会場の中間点、諫早市のビジネスホテルに宿を取り、長

崎市・雲仙市に出て向かいになつた。

大中尾棚田、現地見学

260余年前より4.2haの用水路で造られた6.5haの棚田。櫻原の棚田の2倍の面積。休耕田はゼロのようだ。農家戸数20戸。オーナー制を平成14年に行い、年4回の作業、6月上旬植え、7月上旬草取り草刈り、9月下旬稻刈り、10月上旬稻落とし。ここでは品種の統一ができるようだ。「ヒノヒカリ」一種に、「出穗期8／29成熟期10／12稈長79.0cm食味上上」。私達も検討に値する気がする。ちなみに長崎ではコンパインは見かけない。平場の水田でも全然、「ハデ干シ」である。天日乾燥が食味を増すことを知っている故か。

棚田の中間に休憩所のような駐車スペースがあり、保育所の子供達による太鼓演や「棚田に行こう」の合唱などがされていた。「棚田に行こう」は宮崎県日南市の子供達とその指導者が作った合唱曲で、2006年にデビューした曲だ。

後に気づいたが、胡弓の演奏もあるたよつた。案山子や猪の案山子もあつたが、田の周囲に電気柵があり、猪は入っていないとのこと。棚田に着いたのが1時過ぎで、女性グループが小さなおにぎりとお茶を配つていた。6時（日暮れ時）に田の畦に置いてあつたジュース缶の石油に火が灯された。全地域が「光の棚田」となつた。まさに光のページェントだつた。

ふるさときやらばんの石塚克彦さんは、「日本人は、一生に一度は田んぼの泥の中に入つて、土の感触を学ぶ体験を、必ず学べるシステムを創るのだ」とおっしゃつていられる。来年度の新潟県十日町市60名、栃木県茂木町30名のほか、千葉県鴨川市、愛知県新城市、岐阜県恵那市などそれぞれ緑や紺、黄などいきやがである。大盛会だつた。

清水の棚田、現地見学

島原半島を南北、雲仙山系の山腹、清水の棚田を対岸から見下ろす展望台から棚田の上部に行き、車を置いて

徒歩で棚田に行き、登り下りしながら見学した。石の多い所で全て見事な石積みの棚田だ。角は屋敷石垣にも値するものだ。10ha260枚、

農家戸数37戸。休耕田はゼロ。一部畠地としてヒサカキが植えられている。檍は見られない。墓に祀られるのだらう。

水田の畔は100%「ソンクリート、巾は20cm位で少しせまく感じられる。」

第5分科会——百姓と共に語ろう——山下惣一、宇根豊さんの百姓談義

棚田地域はいずれも高齢化し、後継者はほとんどいなく、イベントは年にぎわうが、常に静か過ぎるくらい静かである。体験で棚田に来る児童の45%は、朝はパン食という数字がある。朝食はご飯、という児童を増やしたい。農家は機械の借金が多く、耕作放棄地がある棚田は生産のみの元気ですとのこと。以前、棚田協議会の個人正会員として活躍されており、明日香川の遊歩道づくりでセキショウの利用をおすすめしたことであった。お元気で何よりだった。

石塚さん宇根さん山下さんと話していく、宇根さんより「上勝でサミットをやる時、是非、山下さんと宇根さんの分科会を」と話が出た。そ

のほか、ライステラスの石井さんがお元気で、3人目のお子さんをお腹に出席させていた。

サミットの前後の町村は、それぞれハッピなどをそろえて出席してい

る。来年度の新潟県十日町市60名、

栃木県茂木町30名のほか、千葉県鴨川市、愛知県新城市、岐阜県恵那市などそれぞれ緑や紺、黄などいきや

がである。しかし長い期間、餌をやつして赤字になる。せいぜい6ヶ月ぐらいいの話も出た。質問の中で「米作りたいのに休耕の義務がある……」

「田を守るために山の森の木を守る方法は」と熊本・愛林館の沢畠さん。

「百姓の5つの種類とは」などなど

が出了。

全体交流会

太鼓演奏、二胡演奏、舞（子供、赤禪、武者など）にぎやかだつた。

会場で明日香川の方と話す機会があり、以前お訪ねしたことのある豊田

さんの弟さんで、帰つて19日（日曜）はオーナー会員で稻刈りをする

こと。オーナーのリーダーである水谷さん（徳島県佐古の出身）も

元気ですとのこと。以前、棚田協議会の個人正会員として活躍されており、明日香川の遊歩道づくりでセキショウの利用をおすすめしたこと

であった。お元気で何よりだった。

（櫻原の棚田村 谷崎勝祥 徳島県上勝町・個人正会員）

お便り
テラス

「棚田(千枚田)に
魅せられて」

つて 1、棚田のとりこにな

今から13年前の秋の事でした。私がＴＶを見ていると、山の段々田んぼの田植えや稻刈りの様子が画面にありました。今時、こんな景色がどこにあるのか、本当にその美しさに感動しました。その作業をしている一組の夫婦もいました。周りの自然、一枚一枚形がちがい、そして段々田んぼ。腰を曲げての傾斜地での仕事。さぞかし大変だらうと、こんな所で、田んぼを作り、もうかるのか、水はあるのか、イノシシや猿の被害は？ 等いろいろ考えました。結局、あまりの美しさに心をひかれ、ＴＶに登場したこの夫婦へ、私は葉書に感想を書き、送りました。

2、黒田農家の文化交流の経過

愛知県新城市四谷の千枚田の一番高い所に一軒、家があります。その

MI様ご夫妻の自宅を訪ねたのは、1回目の葉書の返信に、「是非一度、四谷（当時は鳳来町）へ来てください」との事でした。これが交流のスタートでした。以来、13年間も交流が続いている。途中でやめてしまうか自然消滅になってしまふのが普通ですが、本当に不思議です。

ているのが、交流が続く秘訣でしょ
うか。方言まるだしでのT.E.会談
は、時の経つのも忘れてしまします
今では鳳来のおばさんと家族は呼
んでいます。棚田を通して知り合え
たこの辺は、永久に途切れる事なく
続く事を信じています。

心のよりどころとなるM様ご夫妻
に、毎日感謝をしています。山里の
棚田にはぐくまれた人情は、大切に
していく覚悟です。

3、ライフルークとなつた棚田 (千枚田)

あのTVを見たために、私は、棚田のとりこになりました。棚田の記録を集めたり、本や写真集を買い集めました。全国棚田連絡協議会の個人正会員になりました。年一回開催される棚田サミットにも、可能な限り参加をし、同士と意見交換をする

る様にもなりました。サミットには、全国各地から、棚田に思いを寄せる同士が集うのですばらしい交流・勉強にもなります。私が棚田に興味・関心があるので、家族にも影響を与えました。家族ぐるみで棚田を学んでいます。長男・二男は新聞・TVからの情報を私に提供してくれて、大変ありがたいです。妻は、なぜ、そんなに棚田をと少し冷たい目で見ていました。それでも、協力・応援はしてくれます。私の夢は、県内、国内の棚田をめぐる旅に行く事。そして、健康なうちに世界の棚田を見に行く事です。日本農業新聞は棚田学の良きパートナーです。毎日、読んで、やっぱり棚田漬けの私なんです。

（個人正会員・静岡県浜松市在住）

し、約10分ほどでサミットのテーマ「みんなで語ろう棚田の未来」の文字が浮かび上りました。その幻想的な光に思わず時間が経つのも忘れるほど息をのんで見つめてしまいました。

うも無いくらい美しいものでした。歩き疲れた後、棚田を見下ろしながら食べた、地元の方手づくりのイワナの燻製や煮物が入った弁当とカネ汁の味が忘れられません。

午後は5つの分科会と首長会議が開催され、それぞれの会場において活発な議論が交わされました。これらの議論が棚田の未来に繋がることを祈りにはじめました。

第14回全国棚田（千枚田）サミットに参加された皆様、お疲れ様でした。また、雲仙市・長崎市の実行委員会はじめ、地元の皆様には大変お世話になりました。3日間で180人程が参加され、盛況のうちに幕を閉じました。今回は、熱が冷めないうちに、サミットの報告をさせていただきます。

事務局 ムニス

事務局、栃木県茂木町
からのお知らせコーナー
です。

事会・総会が開催され、予算・決算の承認をいただいた他、サミット開催地として第16回大会に静岡県松崎町、第19回大会に和歌山県有田川町が正式に承認されました。

また、席上いただいたご意見、ご要望については、今後検討させていただきます。

午後からは、長崎市の「アリーナかぶとがに」を会場にサミットがスタートしました。開会式の後、東京農工大学の千賀教授の基調講演のがあり、続いて大中尾棚田への現地見学へと参りました。夕闇がせまってくる頃、棚田に5000個の竹筒を並べて灯りをともす「火祭り」が行われました。棚田のオーナーや地主の方が1人100個もの竹筒に点火

し、約10分ほどでサミットのテーマ「みんなで語ろう棚田の未来」の文字が浮かび上りました。その幻想的な光に思わず時が経つのも忘れるほど息をのんで見つめてしましました。

大会2回目は、雲仙市に移動し清水棚田を見学しました。3キロほど歩きながら眺めると、そのスケールの大きさと手作業で積まれたといふ石積棚田の素晴らしさに驚かれました。暑い中途での休憩所では、地元のご婦人方が新鮮なミニトマトやみかんを出してくれて、参加者の渴いた喉を潤してくれました。清水棚田といえば、清水川、千々石川から注ぐ清らかで豊かな水が棚田の周囲を音を立てて流れる様は、たとえ

歩き疲れた後、棚田を見下ろしながら食べた、地元の方手づくりのイワナの燻製や煮物が入った弁当とガネ汁の味が忘れられません。

午後は5つの分科会と首長会議が開催され、それぞれの会場において活発な議論が交わされました。これらの議論が棚田の未来に繋がることを祈りまではじめました。

最終日は、児童連による事例発表分科会報告の後、共同宣言を採択しましたあと、次期開催地の新潟県十日町市の田口市長による次期開催地挨拶があり、サミットは無事終了しました。雲仙市・長崎市のみなさん、心温まるむじなしど、勇気と感動をありがとうございました。

集中募員会

新しく会員になったみなさま
＜団体会員＞ うきは夢醉塾(福岡県)

棚田の保全・中山間地域活性化のための全国組織

全国棚田(千枚田)連絡協議会

お申し込み・お問い合わせは協議会事務局

茂木町役場 農林課農業振興係

〒321-3598 栃木県芳賀郡茂木町大字

TEL : 0285 · 63 · 5634

FAX : 0285 · 63 · 5600

編 集 後 記

第14回全国棚田サミット、主催者・関係者のみなさま、素晴らしいサミットをありがとうございました。個人的にはサミットに3年ぶりに参加しました。久しぶりに元気なお顔を拝見できた方々もおり、たいへんうれしいサミットでもありました。実は身重で大きなお腹を抱えて行ったものですから、棚田見学会はぼてぼてと歩き、地元のおばちゃんたちに氣の毒がられる始末。また、バス移動が結構あり、長崎の、蒼い海と山あいで空に向かって積み上げられた石垣を見ながら、改めて棚田や棚田サミットが果たしてきた役割を考えるよい時間を持つこともできました。今回もみなさんから感想が集まりました。ありがとうございました。石井里津子



棚田ギャラリー
長崎県の棚田

長崎市大中尾棚田、雲仙市清水棚田のほかに、長崎県には「日本の棚田百選」に選ばれている棚田があと4ヶ所、計6ヶ所あります。この6ヶ所で「長崎県棚田保全代表者会議」を結成し、県一丸となって棚田保全と地域活性化を進めています。

写真上：川棚町、日向棚田

写真右：波佐見町、鬼木棚田

写真下左：南島原市、谷水棚田

写真下右：松浦市福島町、土谷棚田

